

流れに棹さして

—— ライト式と呼ばれる建築との道程 ——

井上祐一

(短大部生活造形研究室)



旧近藤賢二別邸解体 1980年8月

実物からのメッセージ — 研究のきっかけ

長い時間を要してやっと研究と呼べるようになった。取り壊されるという住宅(別荘)の調査に1980年1月に参加し、設計者の建築家・遠藤新(1889-1951)の建築を知ったのが、きっかけであった。この住宅は、旧近藤賢二別邸で、大正14年(1925)に竣工した彼の初期の作品であった。後に辻堂東海岸から藤沢市民会館の前庭に移築(1981)され国登録有形文化財となって久しい。ところで、私は学生の頃、ル・コルビュジェやアルバ・アアルト、アスプルンド、マイヤールなどの作品に興味を持ったが、遠藤のことは知らなかった。彼が、旧帝国ホテル建設時に設計者フランク・ロイド・ライト(1867-1959)のチーフアシスタントとして、日本人スタッフのまとめ役を務めた建築家であると知ったのは、調査を始めてからである。初期の遠藤は、ライトの〈租借〉とも言える作風であったが、1930年代には、インターナショナルスタイルが誌面を賑わす中、〈日本の家〉と呼ぶにふさわしい和と洋を融合させた生活の器のデザインへと変容してゆく。しかし、敷地(勿論周辺環境を含む)・建物・家具・照明器具・敷物・庭などを一体と考えた生活の器としての、建築デザインの特徴は終生変わることはなかった。

因みに、関東大震災後の「美しい東京の再建と建築(十九)」(『時事新報』1924.1.14)に「建築家を坑にせよ」という稿を寄せている。「地震前に一つとして碌な建築があったか、一つもない、出来なかったのだ。(略)地震後にひょっくりとよく出来る様になる筈がない。」そして「只一つ、最後に最も確実な方法がある。建築家—大家、小家、かけ出しのそれを一緒に坑にするのだ。」と、始皇帝の焚書坑儒になぞらえている。

話を戻すが、旧近藤賢二別邸は、外壁の木部の塗装はめくれ、漆喰の一部ははがれ落ち、雨漏りによる床の腐敗など瀕死の状態であったが、建物から発せられる力強い空間の感覚—メッセージ—to引き寄せられた。真夏の解体時に一人現地に通い、い

わゆる現在のツーバイフォーの原型とされる構造をフィルムに収めることができた。大先輩に促されてはじめて記録作業は、気付けば日課のようになっていた。

雄弁な建築、そして裏付けの言説 — 研究入門

当時東京芸術大学の教授であった故奥村昭雄先生(1928-2012)が執筆中の『住宅建築別冊5 暖炉廻りの詳細』(1982)に掲載予定の加地利夫別邸(1928)暖炉の実測調査を引き受けることになった。これが本格的な調査研究への足がかりとなり、建築全体の調査に発展した。調査は、厳しかったが楽しかった。週末には、何人かの学生が集まった。設計の意図、意図に基づくアイデアを探る。寸法を測り作図し、数値と大きさを体感する。設計者あるいは施工者の建築への気概を受けとめる。加地別邸の調査は2年を要したが、住宅を巡る四季を実感でき、多くを学び知った。建築は、雄弁である。各室の家具・照明器具はすべてオリジナルデザインで、部分と全体、部分と部分が互いに語り合うデザインが、外観デザインにも現われ、後に知った遠藤の「全一なる対象として建築を考える」(『東京停車場と感想』『読売新聞』1915)あるいは「部分が相済す美しさ、それがまた全体に参ずる美しさ そして更に全体が部分に及ぶ美しさ、其美しさと真実。」(『住宅小品十五種』『婦人之友』1924)という通りに建築されていた。

人との出会い — 住宅(建築)は人と共にある

こうして旧近藤賢二別邸から始まった調査は、加地利夫別邸、矢田部勁吉邸、石原謙別邸、小宮一郎邸、加地利夫邸、萩原庫吉邸、白井喬二郎他へと繋がっていった。

調査は、建築との出会いだけではない。既に殆どの建て主は故人となっていたが、関係者からの聞き取りで「なるほど」とうなずける建て主の人物像が浮



加地利夫別邸居間と家具

かぶ。そして、建て主の人生や歴史と向き合う。普段は気にも留めないことかもしれないが、建築—殊に住宅は住む人の人生と深くかかわり、共にあると云うことを改めて思う。

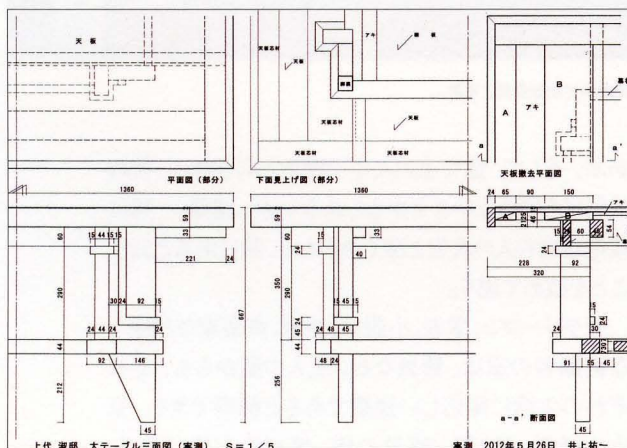
サラリーマン、学者、小説家、画家、声楽家など様々な依頼者の家は、皆異なる。住人の話からも、それぞれの生活に相応しい建築であると納得できる。室内の様子、柱・梁、建具の棧、部材の力強い太さ・繊細な細さ、高い天井・低い天井、部屋と家具配置など相対するもののバランスの妙、そのデザインは、人の動きや気持ちをかたちにしたものであると読み取れる。ライトや遠藤は、植物や動物が生き延びるために機能や形態を変化させて必要不可欠なかたちに至ったように、「不離一体な」「内生的な」(『有機的建築』フランク・ロイド・ライト 訳者/三輪直美)建築を考えていた。遠藤は記す、「建築の参考書は只一つある。(略)旧約書創世紀第一頁にある。『神……をつくり、その各々はよく、その凡てをよしと観たまへり』をいふのである。」と(『創作の一元』『建築の日本』1924)。

家具のこと — 住宅と人と家具

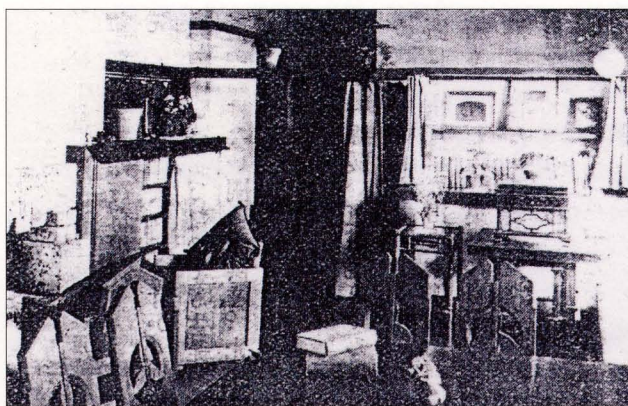
旧近藤賢二別邸の調査から32年、2012年には、



上代淑邸テーブル

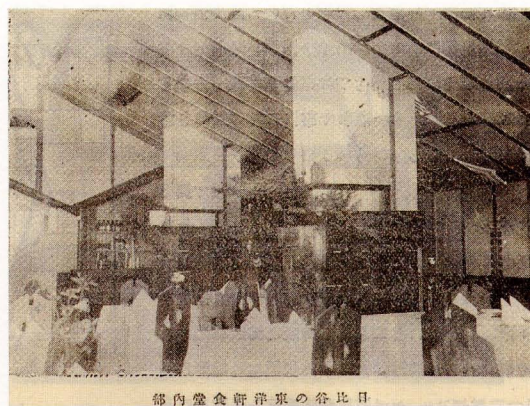


上代淑邸テーブル実測図



上代淑邸室内『みさを』大正13年(1924)3月20日

岡山の山陽学園に保管されていた大小2卓のテーブルを遠藤の設計であると断定した。山陽高等女学校の校長であった上代 淑^{かじろ よし}の住宅(1924)で使用していたもので、旧山邑家住宅(1924国指定重要文化財)にかつて設置されていたテーブルとよく似ていた。住宅の竣工時期から判断し、上代淑邸のテーブルは、旧山邑家住宅のテーブルの原形デザインであるとの結論に至った。また、昭和3年(1928)に竣工した加地利夫別邸のテーブルは、更なる発展形である。このように、建築全体の条件に呼応するリデザインの様子が、実物の観察、計測、図面化で分ってくる。教科書にはできない教育を建築や家具などから授けられた。また、上代淑邸の竣工当時の写真に、テーブルと共に写っている椅子の背は、関東大震災直後のバラック建築である東洋軒(1923)の、縦長の2枚の板の間を直行する板で接続した食堂椅子の背によく似ている。東洋軒の椅子は、2枚の背板それぞれにほぼ半円形の切り抜きがあり、円形の中心に直行する板が縦に通っている。上代淑邸の椅子の同部分は「結び柏」紋の形である。資料により校章が結び柏に酷似していることが分かった。つまり、この椅子は、東洋軒で考案された椅子を基に、校長であった上代淑に相応しいデザインへと展開し



東洋軒室内『時事新報』大正13年(1924)1月15日

たものと判断した。

遠藤は、幅の狭い板を2枚合わせてデザインする理由を、遡る大正12年(1923)6月の『婦人之友』に掲載された「卓と椅子に因む」の中に示している。

生徒たちが卒業の記念に寄贈する椅子のデザインは、質と価格がテーマであった。「試みに普通の考にして見積ったら予算の二倍にもなった」、そこで2枚をつなげて1枚にするのではなく、2枚を2枚として表現することで二次的な手間を省略して、質を落とさずに済むという。「一本の脚に半枚の座席だ。それを二つよせる、つなぐ。座席は込栓で、脚は上方へのびたところを板で、それが直ちに寄りかかりだ。二つが一つだ。」ここでも、基本になる考え方は変わらないものの、各建築に相応しい家具デザインの可能性を追求していることがわかる。

実績と現実 — 経験値と計算値の溝

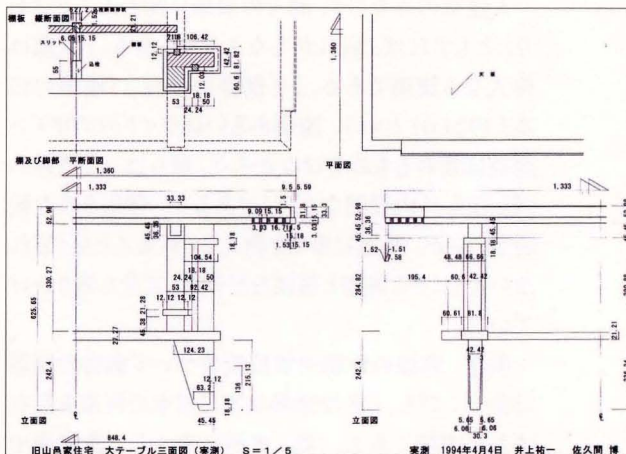
2011年に解体された旧飯能繊維事務所(1950)は木造2階建てであった。現在の構造基準には合致していないものの、木摺り下地漆喰塗の壁にひび割れはなく、風圧や地震に耐え60年を経ていた。外部に面した横に長い開口部の腰壁と小壁の下地板を斜め張りにするなど、遠藤のいう「総持ち」の構造(いわゆる構造材のみではなく、多くの材料全体が構造の役目を果たす)が見られた。

関東大震災後に書かれた「筋かひボルト不適當」(注:「ボルト」はボルトのこと)(『婦人之友』1924.1)には、板による腰壁と小壁の補強について述べており、戦後の建物にも基本とする考えが生きていた。しかし、総持ちによる60年の実績も現在の基準では認められない現実がある。

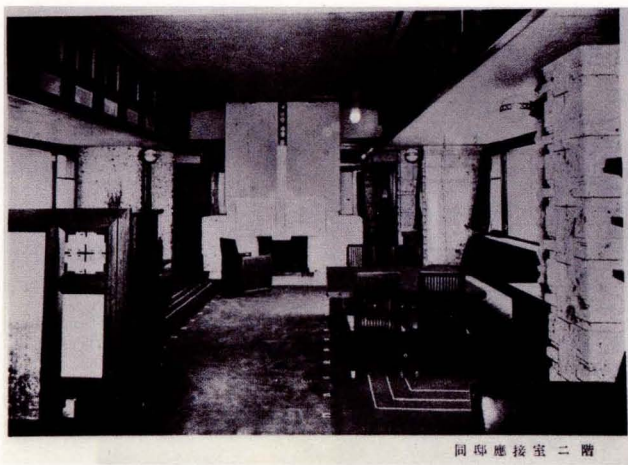
また、「地震と建築」(『婦人之友』1923.10)では、地震で倒れない五重塔を針葉樹と比較し、樹木の成り立ちの自然さと共通する五重塔について論じている。その中で樹木を「最も美しい建築だ。」と記している。自然界のあり方に学び、無理のない、不自然さのない、釣り合いの妙を建築に結び付けてい



実測図に基づく山邑邸(旧山邑家住宅) テーブル模型



山邑邸(旧山邑家住宅) テーブル実測図



山邑邸(旧山邑家住宅) 応接室『新建築』1925年第一巻第二号

る。因みに、わが国最初の超高層ビルである霞ヶ関ビル(1968)の柔構造は、五重塔の耐震性の高さから導き出された構造であることが知られている。

現代へのメッセージ — 今こそ盤石な基礎学習を

部分が全体を造り、部分と部分あるいは部分と全体は密接な関係に於いて成り立っている。部分の寄せ集めでは、見せかけの全体は構築できたとしても、文字通り〈見せかけ〉に過ぎない。このことは、一人建築のみならず、諸々の事象に関わることであり、ともすれば、忘れがちなことでもある。「自然は偉大なる建築である。」(『創作の一元』『建築の日本』1924.6)という、遠藤あるいはライトのデザイン原点は変わるものではなかろう。彼らは、自然界の成り立ち(「内発的なもの」である「一体化された統合性」)が、私達に多くを教えてくれることを(忘れないように)と実物と著述などを通して今も語りかけている。

晩年、戦後の新制中学校校舎について病身の遠藤は語っている。「学校建築は実に日本の将来を左右する大問題である。(略)東西に奔走し、進駐軍や議会やあらゆる機会に世間の注意を喚起せんとするのは止むに止まれぬ憂憤の結果である。そのために卅五年前の古證文迄持ち出して今更同じことをくり返さなければならないのは私にとって決して楽しい経験ではないのだ。」と(『哲学なき教育と校舎 日本インテリへの反省(その2)』『国民』1949)。

ライトや遠藤の「哲学」は、まさに現代社会に適応するものであると、新たな興味を抱きながら研究の歩を進めている。そして、一滴から始まる源流が、やがてせせらぎとなるように、今後も〈伝える〉ことに地道に取り組みたいと思う昨今である。